

7 . 求めなさい。そうすれば与えられます。 Αἰτεῖτε καὶ δοθήσεται ὑμῖν,
お願いする fu.pass.

捜しなさい。そうすれば見つかります。 ζητεῖτε καὶ εὕρήσεται,

ζητέω 神の国とその義を求める、機会を狙う、殺そうと謀る、何とかして~しようとする、努める、試行錯誤する、努力する、追求する

たたきなさい。そうすれば開かれます。 κρούετε καὶ ἀνοιγήσεται ὑμῖν .
fu.pass.

8 . だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。

πᾶς γὰρ ὁ αἰτῶν λαμβάνει καὶ ὁ ζητῶν εὕρίσκει καὶ τῷ κρούοντι ἀνοιγήσεται.
pr. pr. fu.pass.

9 . あなたがたも、自分の子がパンを下さいと言うときに、だれが石を与えるでしょう。

ἢ τίς ἐστίν ἐξ ὑμῶν ἄνθρωπος, ὃν αἰτήσῃ ὁ υἱὸς αὐτοῦ ἄρτον, μὴ λίθον ἐπιδώσῃ αὐτῷ;
fu. fu.

10 . また、子が魚を下さいと言うのに、だれが蛇を与えるでしょう。

ἢ καὶ ἰχθὺν αἰτήσῃ, μὴ ὄφιν ἐπιδώσῃ αὐτῷ;
fu. fu.

11 . してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。
とすればなおのこと、天におられるあなたがたの父がどうして求める者たちに良いものを下さらないことがあります。

εἰ οὖν ὑμεῖς πονηροὶ ὄντες οἴδατε δόματα ἀγαθὰ διδόναι τοῖς τέκνοις ὑμῶν,
pr.pt. pf. 賜物、贈り物 inf. pr.

πόσω μᾶλλον ὁ πατὴρ ὑμῶν ὁ ἐν τοῖς οὐρανοῖς δώσει ἀγαθὰ τοῖς αἰτοῦσιν αὐτόν.
fu. pr.pt.

12 . それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。
これが律法であり預言者です。

οὖν それで、 = 7章1節からの結論 (総まとめ)

Πάντα ὅσα ἐὰν θέλητε ἵνα ποιῶσιν ὑμῖν οἱ ἄνθρωποι,
all things whatsoever

人々への要求が尽きることはない (際限ない、無限)

そのように、なすべき務め (無限の奉仕、自己犠牲) も尽きることはない。

神さまは、我らに無限の奉仕と自己犠牲を要求しておられる。

「そのように、あなたがたも彼らにしなさい。」

= 要求 (権利の主張) ばかり、あるいは人をさばいてばかりではなく、まず自分の責任を果たせ。

直訳: 「『人々があなたがたにしてほしい』とあなたがたが願うことは すべて (何でも)

οὕτως καὶ ὑμεῖς ποιεῖτε αὐτοῖς.

「あなたがたもそのように彼らにしなさい。」

γὰρ = その理由、どうしてそうしなきゃならないのか、その理由は「これ(単数)がまさに律法・預言者であるからだ」

οὗτος ἐστίν ὁ νόμος καὶ οἱ προφῆται.
sg. pl.

これが律法であり預言者だからです。

説教

信仰生活は、言い換えると神さまとの交わりです。

しかもそれは生きた交わりです。

それを単純に表現すれば、

私たちが神さまのみことばを聴いてそれに応答するやりとりということになるでしょう。

そして、それをさらに生きたやりとりとして表現するならば、

マタイの福音書の7章7節から12節のみことばということになるでしょう。

すなわち、私たちが神さまに祈り求め、自らも自分にしてもらいたいことを他の人にしてあげるといいうやりとりです。

心静かにみことばを聞いてそれを行うことは言うまでもなく神さまとの交わりであります。

同じことのさらにダイナミックな別の表現は、

私たちが神さまに祈り求め、同時に自らも自分にしてもらいたいことを他の人にもしてあげるといいうことです。

7. 求めなさい。

そうすれば与えられます。

捜しなさい。

そうすれば見つかります。

たたきなさい。

そうすれば開かれます。

8. だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。

このさらに正確な訳は、次のようになります。

「求め続けなさい。

そうすれば与えられるであろう。

捜し続けなさい。

そうすれば見つけるであろう。

たたき続けなさい。

そうすれば開かれるであろう。

だれであれ、

求める続ける者は受け、

捜し続ける者は見つけ出し、

たたき続ける者には開かれるであろう。」

これは言うまでもなく、

私たちが神さまに対して祈り求めて生きることを意味しています。

ただ一度だけ祈り求めてダメなら諦めるのではなく、

二度も三度も、否たとえなかなか与えられなくてもあきらめることなく、

何度も何度も、ひたすら、愚直に、粘り強く、求め続けることを意味しています。

しかも、「求め」「捜し」「たたく」という三重の表現は、
まずは、神さまに「求め」、
その上で、自分で努力して「捜し」、
そうして、天の門を懸命にたたき続ける姿を表現しています。

「求め」とは、単純に『お願いする』の意味です。
「捜す」とは、
別の訳では
『狙う、謀る、何とかして~しようとする、
懸命に模索する、試行錯誤する、努力する、追求する』となり、
懸命に自分で努力して、ある時は血眼になりながら、何とか解決を図りたいとその方法を模索する様子を意味します。
「たたく」とは、怠けて花婿を迎えそこない閉め出されてしまった花嫁のように、
必死になって、ひたすら「開けてください、開けてください」と門をたたき続ける様子を意味します。

そして、イエスさまはそのようにしなさいと言われる。

つまり、
一度神さまにお願いしたけれども、
願いを叶えてもらえなかったからといって、
あっさり素直に諦める聞き分けのよいあり方ではなく、
往生際の悪い、しつこい、見苦しい、行儀の悪いあり方とも言えるでしょう。

神さまにお願いして、
聞かれなければ「どうしてですか」と問いかけながら、
「どうか開けてください、開けてください」となりふり構わず必死に神さまに食い下がるのです。

こうするためには、
私たちは、大きく天を仰がねばなりません。
真剣に、全神経、全精神を集中させねばなりません。
そして、全身全霊を挙げて、力の限り、思い切り天の門を叩かねばなりません。

そして、イエスさまは、求め続ける者には神さまが与えてくださると約束してくださいます。

8 . だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。

捜し続ける者は見つけ出し、
たたき続ける者には神さまが門を開いてくださるとお約束くださいます。

そして、その理由を次のように説明なさいます。

9 . あなたがたも、自分の子がパンを下さいと言うときに、だれが石を与えるでしょう。

10 . また、子が魚を下さいと言うのに、だれが蛇を与えるでしょう。

**11 . してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。
とすればなおのこと、
天におられるあなたがたの父がどうして求める者たちに良いものを下さないことがありますでしょう。**

ここで、イエスさまは、神さまと私たちの関係を親子の関係として説明なさいます。
パンをくれと頼む我が子に石をよこす親などいないように、
あるいは魚をくれと頼む我が子に蛇をよこす親などいないように、
私たちがたとえどんなに悪い人間であっても、（言わば母性本能、父性本能として）自分の子どもには良い物を与えます。
ちょうどそのように、否もしそうならばなおさらのこと、
天におられる「あなたがたの父」は求める者には良いものをくださらないことがあるか、
そんなことは断じて絶対はない、つまり必ず天の父はあなたがたに良いものをくださると言われるのでした。

ここでのイエスさまの話の力点は、「与えられる」「見つかる」「開かれる」にあります。
つまり、神さまの側には既に私たちにくださる「良いもの」が準備されていて、
あとは私たちがそれを求め、捜し、たたき続けることを神さまは待っておられるということになります。

この話は6章でも言われていて、
そこでは、
「あなたがたの父なる神は、
あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられる」のだから、
「（ことは数が多ければ聞かれると思っている）異邦人のように同じことばをただ繰り返してはいけない。」と言われま
す。

さらには、
自分で蓄財しながら、
食べる心配で明日を思い煩っているのではなく、
地上に蓄財していた自分の宝を天にたくわえ、
「それがみなあなたがたに必要であることを知っておられる」
「あなたがたの天の父」にすべてを委ねて、
ただ「神の国とその義とをまず第一に求めなさい」とも言われます。

このように、イエスさまは、
父なる神さまが私たちに必要な「良い物（別訳『すばらしい贈り物、尊い賜物』）」を備えてくださっていると
言われます。

しかも、
私たちの父としての愛情をもって、
私たちに何が必要であるかもすべてご存じて、
その上で私たちに最も良い物を、尊い賜物を、すばらしい贈り物を備えてくださっているのです。
あとは私たちがそれを求めるだけです。
捜さなければなりません。
そして、たたき続けなければなりません。
私たちが求めるものが与えられても与えられなくても、
とにかく神さまは私たちにいつもどんな時も私たちに必要な日ごとの糧を、
すばらしい贈り物を、尊い賜物を、良いものをひたすらに与え続けてくださっているのです。

12. それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。

これが律法であり預言者です。

「それで」：これまでの話を受けての結論です。

つまり、神さまがそんなにも私たちを愛し、

私たちが求める先から私たちの必要をご存じて、

私たちの求めに応えて、

「すばらしく良いもの」を、

いつも豊かに、溢れるばかりに、惜しみなく与えてくださっているのですから、

だから、あなたがたも隣人に対してそのように良くしてあげなさいとイエスさまは言われるのです。

その「良い」基準はどこにあるでしょうか。

それは「自分」です。

「自分の考え」です。

「自分の価値観」です。

「自分の体験」です。

「自分の感覚」です。

「自分なら人からこうしてもらいたいという願い」です。

「そのようにしなさい」とイエスさまは言われます。

「あなたが、自分が人からこうしてもらいたいと願う一切のこと」を人にしてあげなさいと言われるのです。

「それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。」

そして、それこそが「律法であり、預言者です」とイエスさまは言われます。

「律法」とは十戒を中心とするモーセの律法であり、これは神さまのみこころの中心というべきものです。

「預言」とはその「律法」の原則を時代の現実に応用させていくもので、その時代に於ける神さまのみこころと言えます。

つまり、「何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにする」ことが、「律法」であり「預言者」だ、

すなわち、神さまのお喜びになる神さまのみこころを行うことなのだ、とイエスさまは言われるのです。

それは、自分が他人になし得る最善のことです。

殴られたくなかったら、自分も人を殴らない、

裏切られたくなかったら、自分も人裏切らない、

無視されたくないかったら、自分も人無視しない、

バカにされたくないかったら、自分も人をバカにしない、

差別されたくないかったら、自分も人を差別しない、

その善悪の基準は、自分です。

自分の感覚です。

自分がされたくないことは、人にもしない、

自分がしてもらいたいことを、人にもしてあげる、

人から認められたかったら、自分を人を認めてあげる、

尊敬されたかったら、自分も人を尊敬する、

助けてもらいたかったら、自分も人を助ける、

これが「律法」であり「預言者」なのです。神さまのみこころです。

つまり、

自分が神さまに願ひ求め、神さまが最も良い最善をなして下さるのですが、

同時に、

自分自身も隣人のために自分のなし得る最善を尽くしながら、

(それは神さまがこの私にいつもしてくださっていることを自分もやってみることを意味します)

そうやって、

神さまのお恵み、

神さまのみこころ、

いつも最善をなして下さる神さまのみこころを(自分もやってみながら、痛みを覚えつつ)体験的に学んでいくのです。

神さまの恵みとみこころ、律法と預言を学ぶのです。

後に、イエスさまは、最後の晩餐の席で、

弟子たちに対する愛を余すところなくあらわされた(「その愛を残るところなく示された」)後に、こう言われました。

「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。

あなたがたは互いに愛し合いなさい。

わたしがあなたがたを愛したように、

そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」 ヨハネ 13:34

イエスさまが山上の説教を話された時、

父なる神さまがどんなに私たちを愛してくださっているかが説教されました。

でも、イエスさまが、その御愛をすべて弟子たちにあらわされました。

そうして、その御愛を余すところなくあらわされてから、イエスさまは言われたのです。

「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。

あなたがたは互いに愛し合いなさい。

わたしがあなたがたを愛したように、

そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」 ヨハネ 13:34

ここに集う兄弟姉妹が、

神さまに祈り求め、

神さまからいつも「良いもの」をいただき、

その愛をいっぱいを受けて、

また自分も隣り人を自分のように愛する、

「何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにする」、

そうやって、神さまのお恵みを学びながら、

それをまた実践して、そうやって神と共に歩む信仰生活を生きていかれるよう、主の御名により祈ります。